宵夢婦人論

六

特別
イ4
3163
60(6)

貴
14
3168
60(6)

孫毓修

蓬萊閣藏書

歳時廣記卷之六

時節部

目録

天象
時雨 一丁
冬月 六丁
雪 十三丁
霜 三丁
霰 十二丁
地理
枯野 四丁
時令
初冬 一丁
人事
纲代 七丁
炭竈 廿四丁
草木
落葉 二丁
椎樸 五丁
殘菊 四丁
花類
早梅 廿七丁
生類
水鳥 九丁
千鳥 八丁
寒雁 十三丁
服飾
衾 七丁
雜
冬雜 廿七丁
氷 五丁
歲暮 廿七丁
鷹待 十八丁
神祭 廿四丁
寒草 四丁
除夜 廿七丁
埋火 廿三丁
併名 廿六丁
寒蘆 四丁
本枯 五丁
霙 十二丁
閏十二月 廿七丁
殘歴 十三丁

蓬萊閣藏書

澤存堂

時節部

蔡邕月令曰。冬終也。萬物藏也。漢書律曆志曰。陰者北方。冬者物之方伏也。冬中也。物方孕而中也。礼月令曰。其帝顓頊。其神玄冥。其虫介。其音羽。其數六。其味鹹。其臭腐。其祀行。其祭先腎。注云。氣黑而英青。應鐘。十二月。冬之月。冬盡。冬者物之終也。月令曰。其音羽。律中應鐘。○

○

時雨　孫愐曰。霧雨小雨也。音武。又陰ト雨也。ミヤ。樹雨ト云。又ハ樹ハ雨ト云。又ハ樹ハ雨ト云。又ハ樹ハ

声を発するこゝろもすれども八月の秋の落葉と云するこゝろ
なり　ちりのこる落葉と云ふ　ちりのこる落葉とは紅葉
のこりたるを云ふ　ちりのこる落葉とは初秋に成ぬれば
紅葉の葉は残りたるを云ふ　ちりのこる落葉とは
うつり行く紅葉をもしるべし　郭熙が画の
ちりのこる紅葉とは紅葉の残りたるを云ふ　今も帰るもしらむ
紅葉　落葉　含青　懸泉　弄雅琴　二句　神代にしたがひ
也　源順句　落葉　含青　懸泉　弄雅琴　二句　神代にしたがひ
葉　ちりのこる　○神　こゝろ　○人　○本葉の衣　太平廣記　仙部云　秦時婦人衣本葉　二秋　ちりのこる
くれなゐ　ぬるとも　ぬる人　ぬるき　ぬるみ　ぬる　ぬる人　ぬるき　ぬるみ　ぬる　ぬる人　ぬるき　ぬるみ　ぬる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

枯野

[illegible]

枯野

[illegible]

枯野

○

氷

漢書上洗文曰氷水堅也月令曰要津之月水始凍淮南子曰水向陰則凝而為氷

氷凝冷夜半乃結　雅經

山のゝいろゝの人なるかたちなれやうるはしき　同徽

雅乃下雪がくれやうるはしき

氷

白雪の消ぬる時は春の日の光にとけて水となりけり　雅經

白雪の消ぬる時は春の日の光にとけて水となりけり

氷

白雪の消ぬる時は春の日の光にとけて水となりけり　雅經

氷満遍結　小侍従
芦間結氷　藤仲
堀辺氷
河氷
谷河氷
池氷
池氷作鏡　基俊
朝氷　光俊
氷逐日結
氷不解　藤為忠

○

冬月　源経兼

四月。その夜の月に。雲ひとつ浮かぬ。空のかげ。世の人の。ながめつるかな。

冬月　藤為忠

冬の月。雲も霧も。なかりけり。ひかりを。あらそふ。月の海かな。

冬月　長方

冬月。雲ひとつなき。空の海。月の光を。あらそふ。月の海かな。

冬月　小侍従

冬月。雲ひとつなき。空の海。月の光を。あらそふ。月の海かな。

冬月　藤仲

冬月。雲ひとつなき。空の海。月の光を。あらそふ。月の海かな。

○

冬月　雅有

冬月。雲ひとつなき。空の海。月の光を。あらそふ。月の海かな。

冬晴月　基運

冬晴月。雲ひとつなき。空の海。月の光を。あらそふ。月の海かな。

旅宿冬月　同

冬月。雲ひとつなき。空の海。月の光を。あらそふ。月の海かな。

○

冬衣　漢書曰。上。冬月。以異。詩。百南。公。抱衾與裯。是。衾。大被。裯。卑被。裕。始。漢。狄。以。甫。國。既。渭。寢。衣。可。有。襟。袖。也。○。床。幄。帳。帷。帳。而。非。被。天。八。重。雲。以。奉。陰。剣。こ。大。きなる。衾。ぞ。○。たく。まこも。伊。哀。紀。万。十。五。。梯。衾。野。羅。国。曰。西。。多。久。夫。須。麻。良。夜。麻。可。是。能。。撥。い。本。御。也。。こ。。梯。布。乃。衾。白。きつ。つけ。る。也。。同。集。。ろ。ろ。。を。白。栲。。。

手苅手苅ともあり○あさ食　同上百五寒之母礼波麻被とあり○あさの小食　同上拾遺抄に多くあり
○ばばゝ　物とも　万葉　伎信　拾遺抄の歌太良夫須麻尓和多佐波太伊利奈麻之母乃伊毛我手枕
作　今もゝ　班　食の係　あもと　彼国　ゆ　ゆ　ゆ

て流るゝ水を○ひとへ〳〵をかけてあるく○居ゐ宇治川四上川の
四方のをなかれともをいうこう野河の事をいふなり
綱代　つゝみまつりるあみ　雅經
里人の家もうら山あらし　正徹
山おろす雲とうたがひあるあみ　盛方
あつみの水〳〵ふかう波ふる　河波ふるいうこと　秋実
綱代見月　月かけ小ゐて波ふる
千鳥　俗用鴿字方葉に千鳥又智鳥ともあるぞ皆訓まで上代世人百ち五百鳥ともぞ
百ち鳥ともあり千六百ち上代世人は百ち鳥ともいふ千六百ち鳥ともいふ
若雪東君書往来座とあり冷ちとあり冷ちは鳥ともいふ
あ〳〵もろこしにはすべて鳥ちとはいふ
うつゝかすてらしるくらあり
東コ所伊勢四市ちゐこの海辺に海辺ちとは彼国かけるを
ちとは船にあるも時にすべ
ましはるこうあり形ちはちとは
鷗ちとは海ちとは
交はりかうるとは
ちとは
あるよりは
千鳥

あるよりは
千鳥
うゝ風に吹ちとは
あるは吹ちとは

曉千鳥
夕暮千鳥
深夜千鳥
月前千鳥
雪千鳥

水鳥　鴨　鴛鴦　鴨千鳥

○

水鳥　鴛鴦　鴨　鴨千鳥

○

鴛鴦　雌雄古今注曰鴛鴦終日並游有定在水中央之意或曰雄鳴曰鴛雌鳴曰鴦俗說鴛鴦
則相思而死時珍曰鴛鴦終日並游有定在水中央之意或曰雄鳴曰鴛雌鳴曰鴦俗說鴛鴦
白頸吟和名抄云鴛鴦鴨毛有五采首有纓尾有毛如般柁形時珍曰鴛鴦其形小於鴨毛有五采首有纓尾有毛如般柁形時珍曰鴛鴦其形大于鴛鴦而
家鴨黃色多紫赤好並遊故謂之鴛鴦故謂之鴛鴦
色多紫赤好並遊故謂之鴛鴦故謂之鴛鴦
うく形似ら有也搜神記曰大夫韓明名馮其妻美康王奪之明怨王因之明自殺妻乃陰
腐其衣王異之登臺自殺其臺下九右捉衣不勝手遺書于帝曰願以此骸還韓氏而合葬
王怒令埋之兩塚相望經宿忽見有樟木生二塚之上根交于下枝連其上又有鳥如鴛
鴦常棲其樹朝暮悲鳴南人謂此禽即韓明夫婦之精魂○こゝ人食鴛鴦食禁也
こゝ人食鴛鴦食禁也
ゝて鴛鴦ゝおそれるとゝめて女人奥ゝくゝ此鴛鴦ゝ尾ゝ鴛鴦帳ゝ鴛鴦幌ゝ此鳥ゝ鴛鴦ゝ
ゝ夫婦の縁ゝ鳥ゝ夫ゝ十五ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

麻等多見沈底和我地尾介波之毛末布里曽等之略多倍乃波移古久所信氏
白鳧と云うべし○鴨の水の上に浮かぶ形帖を
くゞりて○鴨の形と云ふ鴨の水の上に浮かぶ
船ぢ六奥鳥鴨云船之 三首あり。
○鴨つく鷹 古事記に意伎郡登理加茂度久斯麻通ぶくしまを
くゞる也○鴨の羽色万べ水鳥久鴨の色乃春光
水の内かれねの色ふる馬とも○鴨の鳥じるの
敏思しあり○鴨のもみる時。
○鳩 順按郭璞方言云鵯鷊 鵯低三音 鷊多達保野鳧小而好浴中也野王案鵯鷊其膏可以宝鈔者
也○ふるゝ鳥 ふるゝ小保騰里能布多理鳥平 ○浮巣 ふるゝ鳥の巣を
下に水鳥知主 ○ふるゝ鳥の巣を
例 ふるゝ鳥の巣を
拙 ○下に
高氏 ○
里能 杜吉奈 我和 岐半 多延 奴等 毋伎 奴尓 可多良年 已等 都 寄米也毋 鳴
○ふるゝ也 ○
とつぐ也 ○
これ汁 ○

凡 奈 我 和 岐 と 加 ー 宮 ○ 奇 と 思 ふ

水鳥

夜水鳥
月前水鳥
池水鳥
河上水鳥
湖上水鳥
嶋辺水鳥

○

雷 陳名図上順按雷 和良乃加美
雷 徐氏雷 先集雷 説文曰雷 礼記曰雷
雷 雷 雷

[illegible]

霰

秋霰

山霰

雨庚霰

○

霙　雨雪雜下也文選雪賦注霙雨雪雜下也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初雪

初雪志深　長方
山路初雪　高家
古寺初雪　隆弘
曉雪　後素飛
夕雪　赤乳母
夜雪　後素
松雪　為仲
[illegible]
山雪
遠見山雪
野雪
河邊雪　覺性
海邊雪　雅有
海邊松雪　為家
湖雪　光經
杜雪
故郷雪

関路雪　光經
山路雪　親盛
旅宿雪
雪中旅人　四基
雪中行人　經信
雪朝待友　基俊
庭雪厳人
雪埋垣樹
雪埋寒竹　為仲
雪之感深　為家

鷹狩　山野　又紅葉をあつて鷹狩をあつめ　光經

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雌雉多ク起ル故鷹人捕ル獲数十雄四月甫定鷹甘部故時人呼其養鷹之處鷹甘
邑也○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師
○四鶴○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師
○鷹○西園寺相国百首中○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師○ちうの師
○ちうの師○ちうの師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]毛(毛)○あげ毛の事きてい[illegible]若鷹[illegible]西園寺あの[illegible]
○[illegible]毛[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くやゐる鷹をおさへてもる時。くらゐをうばひとる。ゆゑに鷹ハ
鳶ともいひ。○たかのたぐひ。とも。いふ。鳥と鵰ゝ。とも。ひとも。ことゝ。ハ。ひとつ。
てハ。ひとつ。ハ。ひとつ。てハ。ひとつ。ハ。ひとつ。てハ。ひとつ。ハ。ひとつ。

ひくらもそれ本人をあの方こひねがひ〇鷹もゆきいひくらんで導八分〇とくだとの
業四家を〇鷹八らるるをとつけく鷹とたいたいあるもらくだらけるあるを
日吹八家をとてく足業の枝五八伐てるるいい栄もいい人代あるさ長い梅保をくくも月八
つ〇こ行もつくらくもしゆ〇小島いとれるそれしれ秋ふくふ萩〇地馬鞭草をくもつ
けい萩ばりうられいくらしされい神八枝をわるへもつくらり〇を筒字を八分をそる
日〇まそ〇ゆくもつの雑とをそくもとを拾へり〇をとそ〇やこうるるも云万十九手知許知鳥
布美立〇又十七〇朝獵介伊保都宅里多底幕獵介知宅理布美多底〇とて鳥八をつる
ものとものをを生てそれのをとをくをくをく

[illegible]

鷹狩 二月三月ノ比ヨリ

[illegible]

雪つもるこずゑのうれとうゑけんもの[illegible]

行宗

[illegible]

同

[illegible]

同

[illegible]

小侍従

雅敏

○

晩頭鷹狩

鷹狩日暮

連日鷹狩

爐火

埋火

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○

神樂 十二月内侍所御神楽 [illegible]

十二月中摂吉震後行 侯所陰陽 師 [illegible]

[illegible]

[illegible]

炭竈

[illegible]

いつくりかくんもくめけるかの雪のあとけなくもとけぬ炭竈

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]ひわこ八度の光明けくかゝる徒とこゝそうけきこゝれく舞そ也○琴行乃ゝ也
江記云御琴可仕者其人把和琴着膝突弾之云云御笛可仕者吾管葉可仕
者云云和琴云云笛云云本方代代八上ゝき管葉い寺ノ上ゝそこれと合奏ゝ云云○上庭七八度
百音作れ[illegible]ゝ神ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

清女曰 ○ 佛名 ○ 佛名乃あるべし。地獄変相屏風などを佛名ごとに
しるしたるなり。なほ佛名ごとにあるべし。

佛名　　こゝのくさのほとけ　　顯仲

早梅　冬梅　年内梅　年内梅花　四年梅花　○ 上五類今案漢土にも早梅・寒梅などいふ。荆楚歳記
云。小寒候梅花發。武昌詩。一樹寒梅白玉條。柳子厚詩。早梅開高樹。一作年内梅。○
年内の梅者花開二家里。○ 年内梅花　梅花春近　梅先春開　梅先春近　春近　梅先春近　梅先春近　三月ばかりに
雪中早梅　　覺性
年内梅　　祐盧院
歳暮　漢武帝時。歳晚。歳暮。十二月の異名。歳晚。歳暮。
○ 十二月尽日をよむ。○ 年の内の月日をよむ。
○ 年の内。年内。年暮。年の内。年の暮。年内。年暮。年の内。年の暮。年内。年暮。年の内。年の暮

舟中歳暮　沖つ波こゝ〳〵問へとくれそうるものゝ〳〵やすきまもなくらむ　孔廣
老後宗元　みつ社ゆく年乃こゝもやとゝぬさ乃あめ波うる秋乃也そう　雅有

○
御十二月　十二月之間あるとそ一ゝごめ
千文ゝ同錦繍成ゝ之ゝ

○
除夜　黄昏ゝ乃ゝ也ゝ乃ゝ月今廣寒云除日除夜今歳以来新とあり○今ゝ乃ゝ〳〵ゝ新度百ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃

時節終

各宗書籍製本發賣所

京都市下京區花屋町通油小路東入山川町五番戸
發行者　永田長左衛門

京都市下京區寺町通松原下ル
大賣捌所　永田調兵衛支店

東京市淺草區北東中町五番戸
同　吉田久兵衛

肥後國熊本市新二丁目
同　長崎治郎